フォーカス包装人

東北ウエノ 包装設計の現状に警鐘

全体最適で物流課題に対応を

「包装設計の基準が長らく見直されず、現状に即した判断ができていない」。東北ウエノ（岩手県一関市、☎0191・21・4531）の鈴木雅彦社長は、現在の包装をめぐる状況に強い危機感を示す。

鈴木雅彦社長

かつて電機や精密機器などの大手メーカーには包装設計の部署が存在し、試験やデータを踏まえた仕様検討が行われていた。しかし近年は組織の縮小や外注化が進み、専門人材が減少。「メーカー社内で適切に判断できる専門人材が減少しており、基準が昭和のまま残っている例も多い」という。輸送環境が変化し、物流の効率化が求められる中で、適正な仕様を決められないまま過剰な包装や不必要なコストにつながっている。

現場では顧客の〝事故ゼロ〟要求に応えるあまり、オーバースペックに振れやすい。鈴木社長は「一度包装事故があると過敏に反応して仕様を上げてしまう。結果としてコスト高になるが、誰も全体での最適化を見られていない」と語る。製品設計と包装設計は最適な商品仕様を決めるうえで密接な関係にあるが、現状では縦割りでのコスト削減が優先され、輸送費、保管費、廃棄費用などを含めたトータルコストでの議論は進みにくいのが実情だ。

さらに憂慮するのは、包装に関する議論や学びの場が失われつつあることだ。かつては日本包装技術協会や日本包装管理士会の勉強会などにメーカーが積極的に参加し、設計や改善の情報共有をしていた。しかし近年は参加が減り、裾野の広がりも見られない。「包装は各工程をつなぐ横串の役割を持つのに、その重要性が十分理解されていない」と鈴木社長は指摘する。

物流の現場では、トラックドライバーの残業規制強化を背景に「物流2024年問題」が顕在化している。長距離輸送の制約やコスト増加が避けられず、供給網全体に影響を及ぼす見通しだ。鈴木社長は「いま必要なのは、縦割りではなく横串を通す視点。包装設計もその一部として物流全体を見直さなければならない」と訴える。

包装は単に製品を守るだけでなく、輸送効率や環境負荷低減にも直結する。鈴木社長は「データに基づいた包装設計を通じて、企業は物流コスト削減と環境負荷低減の両立を実現できる」と強調。企業内で専門人材を確保し、試験やデータに基づく仕様決定を行う重要性を説いた。

「現場から見える課題は多い。だからこそ基本に立ち返り、全体を見渡す設計思想が必要だ。東北ウエノはその役割を果たし、物流課題の解決に貢献していきたい」と力強く語った。